

(6月28日)

韓国における肉類の消費分析

(韓国農村経済研究院) 崔 志弦
李 癸姪

本報告の内容は、1999年度に韓国農村経済研究院で行われたプロジェクト研究の成果に依拠しており、韓国の肉類消費の特徴を明らかにし、今後の消費動向を展望するものである。

1. 肉類消費の変化

韓国での肉類消費の変化を概括すると以下の通りになる。肉類消費量の増加率は、鈍化の傾向にあるが、90年代に入っても年率4.4%の増加を示している。肉の種類別増加率では、数値の高い方から牛肉、豚肉、鶏肉の順になっており、年代別の特徴を見ると、80年代には豚肉の消費が急増し、90年代では牛肉の消費増が加速化する一方で、豚肉、鶏肉の消費の増加率が鈍化している。

また、1998年に肉類消費量は減少しているが、これは、金融通貨危機と米国産牛肉のO-157汚染の影響である。品目別の消費量の内訳は、98年で、豚肉53.7%、牛肉26.3%、鶏肉19.9%となっている。消費は外食での増加が大きく、鶏肉が家庭内消費では減少していることも特徴として挙げられる。

牛肉消費についてみると、韓(国産)牛肉40%、乳牛肉15%、輸入牛肉45%の比率になっているが、近年では、韓牛肉の消費が増大し、乳牛肉の消費が停滞している。輸入牛肉は変動しつつ増加しているが、金融通貨危機による相対価格の変化等により98年に急減している。

2. 都市家計の肉類消費分析

統計庁『都市家計調査』の原データを用いて、都市家計での肉類消費状況を分析した。説明変数として所得と社会経済的要因を導入したエンゲル関数を2時点(1986年と98

年)で計測した。

分析結果からは、牛肉は50歳以上の高齢者層での選好が強く、14~19歳での選好も高まっていることが分かった。豚肉では、98年に、50歳以上の年齢階層で選好が低下し、6~49歳の選好が高まっている。鶏肉でも、50歳以上の階層での選好が低くなり、一方、14~19歳で選好が高まっている。特に、フライドチキンは6~19歳の階層で選好が高まっている。また、牛肉への選好の強い家計は、家計主がホワイトカラーの家計、ソウルに住んでいる家計、大学中退以上の教育を受けている家計等である。

3. 肉類需要の代替関係分析

1976~98年の時系列データを用いて、一次差分の線型近似AIDSモデルにより、肉類間の需要の代替関係の計測を行った。資料としては、肉類の品目別消費量は畜協資料を利用し、価格については、統計庁の品目別消費者価格指数を利用した。

消費支出弾性値は、牛肉1.3、鶏肉0.4、豚肉0.3であり、所得の増加につれ牛肉の需要が大きく増加する趨勢が当分の間続くと予想される。牛肉に対する豚肉の交差価格弾性値は0.22であり、両者の間には需要の代替関係が成立する。牛肉需要に対する鶏肉の交差価格弾性値は、0.04であり特に代替関係は成立していないようである。

4. 肉類の需要展望

肉類需要システムモデルの推定結果を利用して品目別1人当たり消費量を展望し、家計内支出関数推定結果を利用して家計内1人当たり消費量を展望した。2002年までの展望では、1人当たりの肉類消費量は増加の趨勢を持続するが、年平均増加率では高い方から、牛肉、鶏肉、豚肉の順であり、家庭内消費より外食での消費の増加率が大きいことが予測できた。

(文責・會田陽久)